

森林環境におけるガイドエコツアー研修活動が参加者にあたえる効果：
質的一考察 (2)

橋本義郎

**The Effects of a Guided Eco-tour in a Forest Village
on the Participants:
A qualitative study (2)**

Yoshiro Hashimoto

Abstract

In order to find out how an eco-tour in a forest village affects the participants mentally and physically, the author implemented an experimental tour in Kawakami Village in Nara Prefecture. The participants wrote reports on their experiences during the tour. The author analyzed the contents of these reports. The results indicated changes in the participants' perception and feelings of interrelationship between themselves and their environment, movements and actions.

キーワード

エコツアー、環境教育、森林、共生

Key words

Eco-tour, environmental education, forest, cohabitation

本稿は分量の関係から、「国際研究論叢」第29巻第1号(2015年10月)と本号に分載した。「1 主要用語」から「7-1 記録された活動とその効果」については、(1)を参照いただきたい。

7-2 効果についての考察

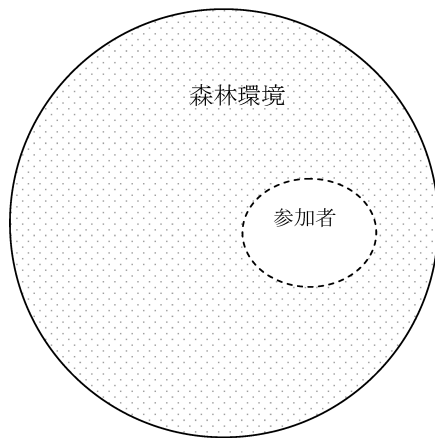
「森の村」のエコツアー研修の参加者の活動には、すべての生き物の活動がそうであるように、活動主体である参加者自身と活動環境との相互作用(環境から作用されつつ、環境に作用すること)がともなう。「森の村」のエコツアー研修における活動は全体としてお

*はしもと よしろう：大阪国際大学人間科学部教授〈2015.6.16受理〉

おきく自然につつまれた環境（自然環境）のなかで展開される。その自然環境に参加者が野外で一人でじかにつつまれる場合もあれば、外の空気を車窓をとおして感じるというように、なにかをとおしてふれる場合もある。これらの関係を略図化すると図1のようになる。また、参加者が集団のなかにおいて、集団と相互作用しながら活動する場合には図2のようになる。

なお、説明の便宜として、参加者による記録がしめしている効果（作用結果の「よい」とみなされる面）のなかの、①「感じ知るへの効果」と②「思考への効果」、③「身の熟し

[森林環境にじかにふれる場合]



[森林環境に人工物のなかからふれる場合]

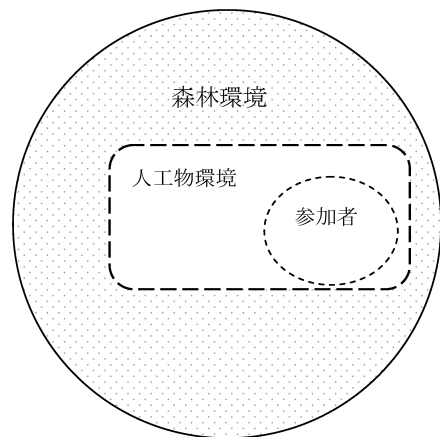
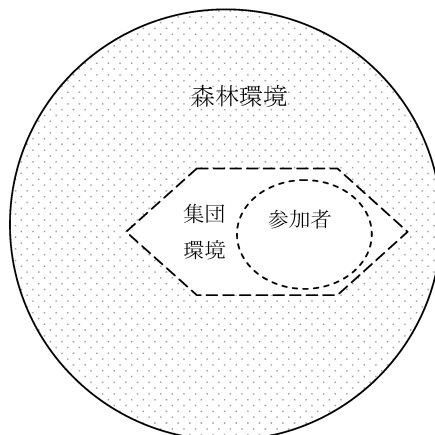


図1 「森の村」のエコツアーにおける単独の参加者と環境

[森林環境にじかにふれる場合]



[森林環境に人工物のなかからふれる場合]

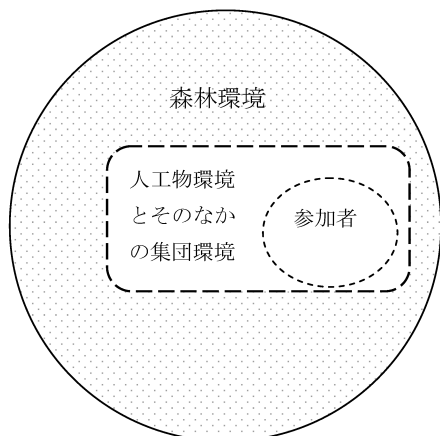


図2 「森の村」のエコツアーにおける集団のなかの参加者と環境

への効果」および④「行動選択への効果」の四つの概念でとらえることができたものに注目し、その内容について考察する。当然のことであるが、実際にはこれら四つの効果は相互に、あるいはそれら以外の作用と浸透したり連動したりしている。

7-2-1 四つの効果概念

感じ知るへの効果

感じることや知ることに影響する効果を《感じ知るへの効果》とする。ここでいう《感じ》とは、感覚でとらえた何かによって起こる体験の内容を、《知る》は物事を知覚したり認識したりすることを意味する。

思考への効果

思考に影響する効果を《思考への効果》とする。ここでいう《思考》は、思いめぐらし考えることを意味する。

身の熟しへの効果

身の熟しに影響する効果を《身の熟しへの効果》とする。《熟し（こなし）》は、『明鏡国語辞典（電子版）』¹によると①こなすこと、②体の動かし方を意味する。本稿における《身の熟し》は、ある状況（たとえば、エコツアーに参加して、足元を注意しながら山道を下るような状況）において、本人の目的や必要に応じての意識的および非意識的な身の動かし方とそれを可能にする内在的能力を意味するものとする。

行動選択への効果

行動主体（行動する本人）が、ある行動をとる前に（またはとりつつ）、その行動をいかなるものにするかを意識的または非意識的に選ぶことを《行動選択》とし、それに影響する効果を《行動選択への効果》とする。

これらの効果分類ではとらえることができない効果のあることも、効果をもたらす活動（効果の源、たとえば自然観察をするという活動）には多面性があり、どの面に注目するか視点によって、とらえられる効果がことなることも、いずれも当然のことであるという認識に立っている。

たとえば、7-2-3の①において、「感じ知るへの効果」と「思考への効果」をしめす記録として、研修レポート上の記述の一部を引用・紹介している。

「岩の上で一人で寝ている時、森の色んな声が聞こえて」と感じ、「本当に森は生きているんだなあ」と思う。

上の引用での直接引用箇所「岩の上で一人で寝ている」の部分に注目すると、もう一つの別の作用をとらえることができる。つまり、「岩の上で一人」というのは「ひとりで自

由に過ごす」時間のときに本人が選んだ行動、すなわち行動選択の結果である。言い換えれば、森を歩いて、その上で一人で寝てみるができる岩に出会うというそれまでの活動とつながっている「自由に一人で過ごす」活動とその環境である森林環境からの作用を受けて、その人は、岩の上に一人で寝るという行動選択をしたとみることができる。

7-2-2 活動主体と活動および環境について

活動主体と活動および環境の相互作用関係

研究対象である活動と活動主体（「森の村」のエコツアー研修活動とその参加者）およびその環境の相互作用関係を図式化すると図3のようになる。

図中の矢印の向きがしめしているように、作用は、活動と活動主体、活動と環境のいずれのあいだにおいても相互的なものである。たとえば原生林のなかを歩いてツアーをするという活動には、林床を踏むという行動がともない、それは森林環境に人圧をかけるということである。そしてその過程を別の視点からみると、その森林環境があつてのその活動であり、活動そのものが森林環境を条件としてかたちづくられていて、その活動が活動主体に作用することがわかる。つまり、森林環境をもとめての活動であり、活動しつつ森の空気をあび、森の作用を受けて活動主体はさまざまなことを感じ、考える。活動主体である参加者は、その活動をとおして環境に作用し、その環境での活動をするという体験とその「ふりかえり」からの作用を受け、何かを感じたり、思いをめぐらしたり、筋力をつけたり、リフレッシュしたり、あるいは疲れたりする。

活動と行動の相互関係

ここでいう「活動」は、一連の「行動」のまとまりであり、何らかの目的への指向性をもったもののことである。たとえば、道ばたのヒノキゴケを観察するという「活動」は、「ただゴケを見る」だけではない。それにくわえて、虫眼鏡をもって細部も見、手や頬

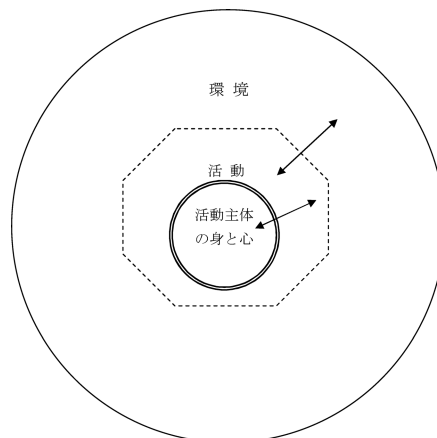


図3 活動主体と活動および環境のあいだの相互作用関係

でコケにふれてみる、匂いをかいでみる、コケについての環境インタプリテーションを聞く、コケの写真をとるといった一連の「行動」も観察活動の要素となり得るものである。

7-2-3 「ひとり」でじかに環境とかがわる活動による効果

人工的なもの（たとえば、スマートフォンやそれからの電子音など）や他の人間からの干渉に影響されることなく、ひとりで原生林などの自然環境のなかで行動する体験をすべての参加者がもつ。この種の体験の効果についてみる。（文中の傍点は直接引用である「 」内も含めて筆者による。）

- ① 自然の音のみの「森の静寂」のなかでの「感じ知るへの効果」と「思考への効果」
 - 「静かで、川の音がいい音で」と感じ、「1人でもいいものだ」と考える。「時間が早くすぎた感じがした」、「ときどきは山もいいものだ」と思う。
 - 「岩の上で一人で寝ている時、森の色んな声が聞こえて」と感じ、「本当に森は生きていたんだなあ」と思う。
 - 「まず、一言で『やすらぎ』でした。本当におちつけたし、最後の命は、ここなのかなとも思いました。時間がかかりはやく感じました」。
- ② 自然の音のみの「森の静寂」のなかでの「行動選択への効果」
 - 「20分間、自然の中になると、すごく居心地がよくなった。目をつぶってみると、これでもかかってぐらいに川の音がキレイだった」。
 - 「1人で30分近く山の中にいた。川の流れや音をきいたりみたりして、リフレッシュできたと思う」。
 - 「1人の時間のとき、周りをゆっくり見て自然の生命力を感じ」、「もっと自然に感謝しないといけない」と考えている。
- ③ 「歩き」にともなう「身の熟しへの効果」
 - 「帰りは行きよりとても早く感じた。バランスもよくなった」。
 - 「人が1人とおれるのがぎりぎりの所を歩いていくのは、ドキドキした。橋をわたっていくところも良い経験になった」。
- ④ 川とふれあうことの「感じ知るへの効果」と「思考への効果」
 - 「水のなかに、はだしで入り、石が少し痛かったが、気持ちよく、入った後は足が軽くなったような気がする」。
 - 「水がとてもきれいで、上と下の川では、水のきれいさと温度も違ってくるのだと感じた。上の景色を10秒ぐらい見ていたら自然をより近くに感じているような気がした」。
- ⑤ 清らかな川の流れや淵との出会いの「行動選択への効果」
 - 「水が冷たくてきれいで飲むことができた。魚なども見ることができた」。

森林の自然環境のなかでの「ひとりでの体験」について、日ごろ自然とふれあう機会がほとんどない人も含めて、記録をしている人のすべてがその人なりに、じかに森の自然を体感し、自然や自分についての思考と発見を自分のものになっている。また、時間がはやく過ぎたと感じたという記録が、上に紹介したもの以外にも多数みられる。

こうした事実から、自主的選択で「水源地の森」に来た人にとって、その自然環境での「ひとりでの体験」は、多数の参加者に、本人が有意義だと思える（少なくとも退屈ではない）時間となりえたと考えられる。また、参加者が自身が自然の一部としての自分に気づき、自然とまじわる体験をし、新しい「身の熟し」や「行動選択」を自分のものになっているとも解釈できる。

7-2-4 「森の村」のエコツアー研修における共同活動による効果

共同活動、「誰かと共に」何かをする活動の効果についてみる。

- ① たがいの「うちとけ」をうながすグループ活動の「思考への効果」
 - 「サークルボールで自己紹介をして、いろいろな人の名前を覚えることができた」と考えている。
- ② 環境インタプリテーションを共に受ける活動の「感じ知るへの効果」と「思考への効果」
 - 「コケに水をふくませると感じよく変わっておもしろかったし、いきているんだなあと感じた」。フタリシズカの花を見て「それにまつわる義経の話がおもしろかった」。
 - 急な斜面に立つ多数の木の根がたがいに絡み合いながら支え合っていることについてのインタプリテーションとして「人間と同じで木もささえ合って生きているというのを聞いてすごく深いなあと思ったし、感動した」。
- ③ 共同宿泊と共同の「ふりかえり」による「感じ知るへの効果」と「思考への効果」
 - 「コテージに来たのは初めてだったので落ち着かないけど、木の家は気持ちのいいものだと感じました。用意された食事もおいしかった」。
 - 「1日をみんなでふり返ることによってどんなことをして、どんなことを感じたかをそれぞれに知ることができていいなと思った」。
 - 「温泉とても気持ち良く、露天風呂は山を見ながらで、とてもゆっくりな時間を過ごすことができた。ご飯もおいしく、おかわりした。アレルギーのことも考えてくださり、うれしかった」。
 - 「朝起きて外の天気を見たとき、木が一面に立っていて、良い天気だったし、とても気持ちよかった」。
- ③ 間伐体験活動にともなう「感じ知るへの作用」と「思考への作用」
 - 「グループの皆で協力して1本の木を切り倒した瞬間は感動しました」。
 - 「初めて木を切り、1本の木を作るのに、あれだけの時間と体力がいることを知った」。

- もやい結びは「車をはこぶときにも使われているひもの結び方である。ひもを木の上にあげるには、ポウリングをするような動きで、ひもをしならせながらするのがコツだとわかったが、なかなか上手くできなかった。木を倒すにも、色々判断し見極めが難しいのだと思った」。
- 「間伐する際、どの木を切るべきなのか選ぶ基礎は上を見て、横の木を押し合いになっていないかで判断する」と知る。
- 「ノコギリで木をまっすぐ切るには首と体を左右に動かさずにやると聞いたが、上手にできなかった」と考えている。

④ 間伐作業にともなう「身の熟しへの作用」

- 「もやい結びや、縄を上にあげていく作業などはコツがわかれば簡単にできて楽しかった」と、「コツ」をつかんで、もやい結びが簡単にできる「身の熟し」を身につけた体験を記録している。

「サークルボール」のようなグループワークでたがいのうちとけ合える程度の大きさの（自然環境への人圧が過度にならないエコなサイズでもある）グループでのガイドエコツアーならではの作用があることがわかる。たとえば、間伐体験は、山村や林業との独自のつながりをもたない、一般の学生にとっては、その機会をつかむことがまず難しい。その機会をもてたことじたいが、「森の村」のエコツアー研修の効果の一つといえる。

また、初心者には困難な1本の木を手作業で間伐するという作業を、緊張はするけれども「やってみよう」と行動選択できたことも、もやい結びを学んだりしながら実際の間伐技術を習い、使ってみることができたことも、一本の木を切り倒す感動の分かち合いを体験できたことも、ツアーグループがあったなればこそ、つまりツアーグループとしての共同活動の効果とみることができる。

さらに、「ふりかえり」の時間などに、他の参加者の感じ、考えたことなどを知り、そのことに触発されてさらに感じ考えるという体験も、共同活動の効果とみることができる。

7-2-5 「ひとり」での「ふりかえり」にともなう効果

全体をふりかえることにともなう効果についてみる。

① 「森の村」での体験を普段の生活での体験とくらべることの「感じ知るへの効果」と「思考への効果」

- 「普段の生活ではコンビニなどに行けば、欲しいものがすぐ食べれたけど、このエコツアーでは欲しいものがなかなか手に入らなかったり、・・〈中略〉・・でも、普段の生活のことを忘れて、自然に触れ合うこともとても大切なことだと思った」。
- 「僕たちが住んでいる所は便利で不自由ない生活だとあらためて思った。コンビニも自販機もない所がまだあるということにも驚いた。正直、不便だと思ったけど、川上村には普段の生活で忘れかけていた植物や動物への生かされている感謝や、共に生きる

という事を教えられた。短い間でこんなにも考えさせられたのは村の環境や人々のあたたかさがあったからだと思う」。

② ツアーをとおしての自分自身の変化をふりかえることの「感じ知るへの効果」と「思考への効果」

- 「2日間なれない山を歩き、木を切り、普段なら疲れ、気分も下がるが、自然を感じながら動いたので気持ちのいい疲労で、このツアーを終えることができた」とふりかえり、感じ、知り、考えている。
- 「私はアウトドアなタイプなので山に入ってからはずっと楽しかったです。見る物すべてが異なる形をしており、(自分が住む) 寝屋川では目にするのがむずかしい風景ばかりでした。2日目のおばあちゃんのおにぎりは美味だった。そしてほくは林業に就職したいと思ってきた」と感じ、思うようになっている。
- 「最初は虫が多くて嫌だなあと思っていた」感じ方が、「これが本来の状態なんだと考え」、「気にならなくなった」とふりかえりながら考えている。

ツアー全体をふりかえり、「森の村」での体験を普段の生活での体験とくらべながら感じ、考えたことやツアー開始前やその直後の自分（「ツアー経験前の自分」あるいは「ツアー経験わずかな自分」と、ツアーをある程度経験してからの自分（「ツアー経験後の自分」とをくらべ感じ、考えたことを、ほとんどの参加者が研修レポートに記している。この「ふりかえり」そのものが、エコツアー活動全体の効果の一つであると、まず、みることができる。

そして、くらべながらの「ひとり」での「ふりかえり」による効果ももちろんみられる。たとえば、②の最後に紹介している記述がそうした「ふりかえり」「くらべる」思考をしめしている。「最初は虫が多くて嫌だなあと思っていた」感じ方が、「これが本来の状態なんだと考え」るようになり、虫が普段の生活の場とくらべて多いのが本来の自然の状態、生き物が自然に生きる環境での本来の状態なんだと考えるようになり、また、そう考えると、「虫が多くて」と感じ、考えることがなくなり、そうしたことが「気にならなくなった」という「ふりかえり」の内容とその効果をしめす記述がなされている。

8 まとめ

「森の村」のエコツアー研修活動にともなう効果で、ツアー参加者（活動主体）に影響するものを、①「感じ知るへの効果」と②「思考への効果」、③「身の熟しへの効果」、④「行動選択への効果」の四つの効果概念でとらえ、それらの内容と相互関係について考察した。

「森の村」のエコツアー研修活動の効果

これら四つの概念でとらえることのできた効果は大きくまとめると次のようになる。

〔「ひとり」での活動にともなう効果〕

- ①自然の音のみの「森の静寂」のなかで「ひとり」でじかに森林環境とまじわりすごす活動にともなう作用としての、「感じ知るへの効果」と「思考への効果」および「行動選択への効果」。
- ②森林環境のなかを歩く活動にともなう作用としての「身の熟しへの効果」。
- ③清らかな川やその淵に出会いふれる活動にともなう「感じ知るへの効果」と「思考への効果」および「行動選択への効果」。
- ④「森の村」での体験を普段の生活での体験とくらべながら「ふりかえる」活動にともなう「感じ知るへの効果」と「思考への効果」。
- ⑤「森の村」のエコツアー研修をとおしての自分自身の変化を「ふりかえる」活動にともなう「感じ知るへの効果」と「思考への効果」。

〔共同活動にともなう作用〕

- ①参加者の「うちとけ」をうながすグループ活動の「思考への効果」。
- ②環境インタプリテーションを共に受けつつ森林環境とまじわる活動の「感じ知るへの効果」と「思考への効果」。
- ③共同宿泊と共同の「ふりかえり」の活動にともなう「感じ知るへの作用」と「思考への効果」。
- ④グループで指導を受けながらの間伐体験活動にともなう「感じ知るへの効果」と「思考への効果」および「身の熟しへの効果」。

諸効果のつながり

次に諸効果のあいだの関係についてみると、そこに「つながり」があることをたしかめられる。例を二つ紹介して説明してみる。

その1。「岩の上で一人で寝ている時、森の色んな声が聞こえて」と感じ、「本当に森は生きているんだなあ」と思うという体験が記録されている。これは「感じへの効果」が「思うへの効果」へとつながっていることをしめす記述とみることができる。

その2。「1人の時間のとき、周りをゆっくり見て自然の生命力を感じ」、「もっと自然に感謝しないといけない」と考えたことが書かれている。これは、森の静寂な環境のなかで「ひとり」ですごす活動に「周りをゆっくり」見る行動を選ぶことをうながす「行動選択への効果」があり、その作用による行動が自然の生命力を「感じ知るへの効果」をもたらし、その「感じ知るへの効果」が、さらに、「もっと自然に感謝しないといけない」という考えを生む「思考への効果」へとつながっているということをしめす記述であると解釈することができる。

普遍的効果についての考察

普遍的効果（すべての参加者についてみられる効果）について考察し、本稿をむすぶ。そうした効果の一つは、参加者自身と環境との相互関係性についての「感じ知る」や「思

い考える」に変化をもたらし、その結果として自身と環境との相互関係性そのものも変化させる効果であるとかんがえられる。たとえば、ある参加者は、「最初は虫が多くて嫌だなあと思っていた」森林環境とそこで生息する野生生物についての自身の「感じ」が、「これが本来の状態なんだと見え」、「気にならなくなった」というふうに変化したことについて、「森の村」のエコツアー研修全体をふりかえりながら思い、考え、気づいている。ツアーを体験してからの、虫（参加者にとっての環境の1要素でもある）との参加者のかかわり方は、それまでのものとはちがうものになると筆者は推察している。こうした変化をたしかめるための研究方法の開発を今後めざしたい。

注

- 1 Kitahara Yasuo and Taishukan (2002-2010)。

参考文献（あいうえお順）

- 石川統（1988）『共生と進化：生態学的進化論』培風館。
- 川上村役場（2005）『川上村村勢要覧2005：水の旅人』川上村役場。
- Kitahara Yasuo and Taishukan（2002-2010）『明鏡国語辞典』（電子版）、大修館書店。
- 全国林業改良普及協会（2005）『SGEC 森林認証審査報告書（川上村村有林 平成17年3月）』。
- 只木良也（1988）『森と人間の文化史』日本放送出版協会。
- 津田敏秀（2013）『医学的根拠とは何か』岩波書店。
- 谷田貝光克（1995）『森林の不思議』現代書林。
- 橋本義郎・玉井久実代・木村全邦（2015）「原生林ガイドエコツアーが参加者におよぼす作用について
の研究：2014年初夏のツアーにおける参加者のストレス度と体調および気分」、大阪国際大学紀要
『国際研究論叢』第28巻第3号、47-63頁。
- 橋本義郎・玉井久実代・木村全邦（2013）「森林とかわる活動が人間におよぼす作用についての研
究：原生林エコガイドツアー参加者のストレス度と体調および気分」、大阪国際大学紀要『国際研
究論叢』第26巻第2号、59-72頁。
- 橋本義郎・黒川清・木村全邦（2011）「森林とかわる活動が人間におよぼす作用についての予備的研
究：原生林ガイドエコツアー参加者のストレス度と体調の変化についての調査方法開発のための
予備的フィールド調査」、大阪国際大学紀要『国際研究論叢』第25巻第1号、177-188頁。
- 橋本義郎（2009）「『森の村』のエコツアー研修の実践過程：着想から実施までの簡略の省察」、大阪国
際大学紀要『国際研究論叢』第22巻第2号、25-48頁。